

## # 今月の特集関連本



# 《シリーズ ケアをひらく》 病んだ家族、散乱した室内 援助者にとっての不全感と困惑について

春日武彦＝著

本体 2,200 円＋税／A5 判・228 頁／医学書院／2001

一筋縄ではいかない家族の前で、われわれ援助者は何を頼りに仕事をすればいいのか？「善意だけでは通用しない現場」を実感する医療者は多いはず。罪悪感や無力感にとらわれないためにはどんな「覚悟とテクニック」が必要なのか——空疎な建前論や偽善めいた原則論の一切を排し、「ああ、そうだったのか」と腑に落ちる発想に満ちたベストセラー。



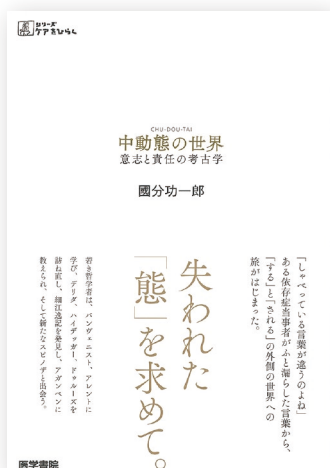
# アディクションアプローチ もうひとつの家族援助論

信田さよ子＝著

本体 2,000 円＋税／A5 判・224 頁／医学書院／1999

本書では、「暴力」もアディクションの1つとらえている。そして、それを家族の問題として、個人の精神病理に目を奪われることなく、「家族」を援助する必要を説く。一方で「援助」は、それ自体が「支配」という暴力にもなりかねない。では、どう「援助」すればよいのか？

「非援助の援助論」ともいうべき逆説とスリリングな発想に満ちた本書は、多くの医療職を悩ませている「家族問題」の理解に新しい視点をひらく。



# 《シリーズ ケアをひらく》 中動態の世界 意志と責任の考古学

國分功一郎＝著

本体 2,000 円＋税／A5 判・344 頁／医学書院／2017

第16回小林秀雄賞を受賞。本書は、依存症当事者との対話から始まる。「世間の人とはしゃべっている言葉が違うのよね」。自分への暴力をやめられない自傷患者は言う。「切ったのか、切られたのかわからない。気づいたら切れていた」。

「暴力をふるいたくないけど、気づけばふるってしまっている」……？こうした状況をどう理解して、支援につなげればよいのだろうか。「中動態」が、そのヒントになるかもしれません。若き哲学者による《する》と《される》の外側の世界への旅、ケア論に新たな地平を切り開く画期的論考。